

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

23号奨励研究・指定研究（報告書）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2025-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日本赤十字九州国際看護大学 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/2000105

著作権は本学に帰属する。

様式第 5 号 (第 7 条関係)

令和 6 年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理 番号	# (奨励 22-1) 奨励・指定	研究代表 者氏名	福島 綾子	職位	講師
研究 組 織	氏 名		職 位	役割分担	
	研究代表者：福島綾子		講師	統括、研究計画、翻訳、データ管理、校正前原稿執筆	
	研究分担者：櫻本秀明		教授	研究計画、翻訳、調査、データ管理、統計解析、校正前原稿執筆	
	相川 玄		助教	研究計画、調査、翻訳、統計解析、校正前原稿修正	
	大内 玲		准教授	研究計画、翻訳、調査、校正前原稿修正	
	池田 光輝		看護師	研究計画、翻訳、調査、校正前原稿修正	
研究課題名 医療事故の第 2 の被害者の経験と支援リソースに関する研究					
研究実績の概要 (抄録程度の研究の目的、方法、考察、結果を記載してください。) 【研究の背景と目的】ICU において医療過誤や有害事象の発生率が高い。医療過誤や有害事象に関与した医療従事者は不安や抑うつ、心的外傷後ストレス障害などの症状を呈することが報告され、第 2 の被害者 (Second Victim: SV) と称されている。SV の経験や SV が求める支援リソースについての調査ツール「Second Victim Experience and Support Tool-Revised (SVEST-R)」が開発されている。しかし、日本で使用できる SVEST-R はまだないため、日本語版 SVEST-R (J-SVEST-R) を作成し、その妥当性、信頼性を評価することを目的とした。 【方法】原著者に翻訳の許可を得たうえで、Back-Translation 法を用いて翻訳チームにて J-SVEST-R を作成した。原著者による内容確認のうえ、医療安全分野の専門家チームによる明確性の確認を行った。さらに、構成概念妥当性を確認するために 2023 年 3～4 月にかけて 1 施設大学病院に勤務する全ての医療従事者を対象に調査用紙を配布し、インターネットの調査フォーム SurveyMonkey を用いて調査を行った。アンケートには、回答者の背景情報、J-SVEST-R の各項目が含まれた。確証的因子分析を行い、適合度の指標として二乗平均平方根近似誤差 (RMSEA)、Tucker-Lewis 指数 (TLI)、比較適合指数 (CFI) を算出した。RMSEA は <0.08 を許容可能、TLI と CFI は >0.90 を許容可能と判断した。項目の適切性を判断するために標準化因子負荷量を算出し、>0.40 が適切とした。 【結果】1807 人にアンケートを配布し、回答数は 132 名 (回答率 7%) であった。男性 52 名 (39%)、年齢 38±9 歳、経験年数は 14±9 年であった。RMSEA は 0.071 (90%CI: 0.063-0.080)、TLI は 0.814、CFI は 0.836 であった。全ての項目で標準化因子負荷量は >0.40 であり、適切であった。 【結論】J-SVEST-R の構造的妥当性は許容可能であることが確認された。現在、J-SVEST-R を用いて日本の医療従事者、特に ICU や ER といった救急・集中治療領域での Second Victim Syndrome					

(SVS) の実態と SV が望む支援リソースについて明らかにすることを目的に、研究を継続している。最終的には、患者安全事象に関与した医療従事者の SVS の予防や症状緩和のための支援プログラムの開発を目指している。
研究発表の方法 (大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する)
Journal of Patient Safety 投稿中 (1 回目の査読への返答を終えている)

様式第 5 号 (第 7 条関係)

令和 5 年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理 番号	# (23-1) 奨励 指定	研究代表 者氏名	山本 孝治	職位	准教授
研究 組 織	氏 名	職 位	役割分担		
	研究代表者：山本 孝治	准教授	研究全体の計画、データ収集・分析、論文の作成		
研究課題名					
クローン病患者へのセルフケア支援に関する文献検討					
研究実績の概要 (抄録程度の研究の目的、方法、考察、結果を記載してください。) 背景・目的：クローン病は原因不明で永続的な治療が必要で、患者には主体的なセルフケア実践が求められるため、看護師はセルフケアを高める支援を行う必要がある。本研究は、クローン病患者へのセルフケア支援内容とその効果を文献から明らかにし、患者のセルフケアを高めるために有効な支援について検討することを目的とした。 研究方法：医学中央雑誌 web、PubMed、CINAHL を用いた文献検討を行い、本テーマに即した 16 文献について検討した。 結果：クローン病患者へのセルフケア支援内容は、セルフモニタリングの強化 4 件、食事栄養療法 3 件、ストレスマネジメント 3 件、運動療法 3 件、生物学的製剤に対するアドヒアランス向上 2 件、禁煙 1 件であった。ストレスマネジメントに関する支援の効果として、症状や疾患活動性の改善、QOL の向上がみられた。運動療法に関する支援の効果として、骨密度や筋力、身体活動機能の向上、ストレスの低減、疾患活動性の低下、QOL の向上がみられた。 結論：クローン病患者のセルフケアを高めるには、双方向性による継続的な支援に加え、知識や情報の提示に留まらず具体的な実践スキルを提供することが有効であることが示唆された。					
研究発表の方法 (大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する)					
・学会発表：2024 年 3 月 6-7 日開催の 27th East Asian Forum of Nursing Scholars にてタイトル "Literature review on self-care support for patients with Crohn's disease" でポスター発表を行った。 ・論文投稿：日本赤十字九州国際看護大学紀要第 23 号 (2025 年 3 月発刊予定) に掲載が決定している。					

様式第 5 号 (第 7 条関係)

令和 5 年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理 番号	# (23-3) 奨励・指定	研究代表 者氏名	木村涼平		職位	講師
研 究 組 織	氏 名		職 位	役割分担		
	研究代表者：木村涼平		講師	キーワード・検索データベースの 選定、検討、レビュー、論文作成		
	研究分担者：梶原弘平		准教授	キーワード・検索データベースの 選定、検討、論文内容確認		
	伊藤明子		教授	キーワード・検索データベースの 選定、検討、論文内容確認		
	中山晃志		教授	キーワード・検索データベースの 選定、検討、論文内容確認		
	櫻本秀明		教授	キーワード・検索データベースの 選定、検討、論文内容確認		
	原田紀美枝		准教授	キーワード・検索データベースの 選定、検討、論文内容確認		
	福島綾子		講師	キーワード・検索データベースの 選定、検討、レビュー		
	宇都宮真由子		助教	キーワード・検索データベースの 選定、検討、論文内容確認		
	吉原駿		助教	キーワード・検索データベースの 選定、検討、論文内容確認		
	多川綾子		図書館司書	キーワード・検索データベースの 選定、検討、妥当性の検証		
	白倉理絵		図書館司書	キーワード・検索データベースの 選定、検討、妥当性の検証		
研究課題名 VR 映像を用いた防災教育に関するスコーピングレビュー						

研究実績の概要

(抄録程度の研究の目的、方法、考察、結果を記載してください。)

【目的】減災教育における VR 活用の現状、VR シナリオと災害の種類、VR プログラムにおけるユーザーインタラクティビティについて、スコーピングレビューの手法を用いて調査し、研究ギャップを明らかにする。

【方法】VR を用いた減災教育の実態を包括的に調査した。Arksey と O'Malley の方法論的フレームワークおよび PRISMA-ScR の報告ガイドラインに従い、スコーピングレビューを行った。プロトコルは UMIN Clinical Trials Registry(UMIN000052800)に登録した。PubMed, CINAHL, Cochrane Central Register of Controlled Trials in the Cochrane Library, 医中誌 Web の各データベースの開始日から 2024 年 1 月 31 日まで検索した。適格基準は、VR を用いた防災・減災教育に関する研究で、研究デザインや国、言語は限定しなかった。除外基準は、Letter to Editor, 論説・解説, 総説, 全文が掲載されていない学会抄録, 非学術誌に掲載された論文とした。

【結果】592 件が抽出された。重複を除外後、516 件をスクリーニングし、17 件の論文を全文評価した。研究デザイン、出版タイプ、結果の相違により 11 件が除外され、最終的に 6 件の論文が抽出された。実施国は、3 件は東アジア、1 件はオーストラリア、1 件は北米で実施され、残りは不明であった。災害の種類は化学、放射線、爆発、火災、地震であり、VR シナリオは災害現場からの避難や避難時の応急処置、患者搬送訓練、トリアージ、除染などの技能訓練に関するものであった。このうち、VR によるユーザーインタラクティビティを確認した研究は 5 件であった。6 件中 5 件の VR シナリオは、医療従事者や看護学生などの専門家を対象としていた。

【考察・結論】減災のための VR トレーニングは、専門家向けのプログラムが主流であり、これらのプログラムが VR による減災教育の効果と重要性を示している。しかし、一般市民を教育対象とした研究が不足しており、市民の減災教育の課題が示唆された。特に後発開発途上国では研究が実施されておらず、地域特有の問題に対処するための包括的なアプローチが必要となる。災害対応能力を高めるためには、市民にも減災教育を普及させることが重要であり、VR を活用した教育プログラムがその一翼を担える可能性がある。

研究発表の方法 (大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する)

論文

Kimura R, Fukushima A, Kajiwar K, et al. (November 20, 2024) Scoping Review of Virtual Reality (VR)-Based Disaster Mitigation Education. Cureus 16(11): e74062. doi:10.7759/cureus.74062

ポスター発表

VR を活用した減災教育に関するスコーピングレビュー：木村 涼平, 福島 綾子, 梶原 弘平, 櫻本 秀明, 吉原 駿, 原田 紀美枝, 中山 晃志, 伊藤 明子, 第 44 回日本看護科学学会学術集会 2024 年 12 月 8 日.